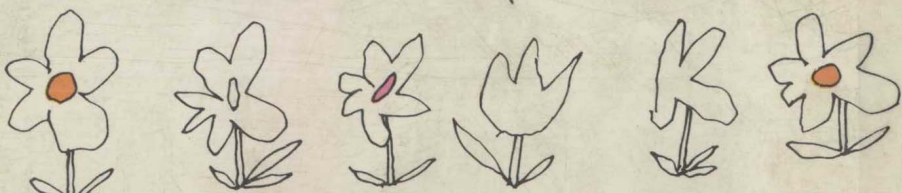


三郎物語



大原富枝



三郎物語



大原富枝

三郎物語 さぶろうものがたり

一九七六年七月一〇日 印刷
一九七六年七月二〇日 発行

著者 大原富枝

編集人 桑原隆次郎

発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市千代田区堀内町

印刷 中央精版
製本 佐久間製本

三郎物語
目次

三郎来たる	7
泥棒氏との出会い	14
泥棒氏との対話	25
三郎とアーモンド	37
三郎、山に来る	45
シロとチビ	62
チビの青春	73
夏、多感	81
チビ重傷	98
シロとチビと三郎と	109

三郎、チビの鞆当て

117

三郎とチビ、男の対決

132

泣きつつわれの……

146

夏の終り

154

三郎、青春を迎える

166

熊公の出現

178

三郎受難

188

幹立ほそき白樺の

201

あとがき

231

大原さんと三郎とシロとチビと
遠藤周作

235

装幀と挿画
題 字 矢萩春恵
長尾みのる

三
郎
物
語

三郎来たる

ほの暗いバスケットのなかで三郎は小さい身体を一層小さく、まん丸くちぢめて震えていた。まるで蝸牛かたつむりのように自分の身体のなかに自分を埋めて、自分の体温のなかに溶けこむように身体をちぢめていると、不安や心細さが少しは堪えやすい気がするともいうように。

外は物凄い轟音で、人間の十六倍も鋭いといわれる三郎の鼓膜はいまにも破裂しそうだ。おまけにバスケットごと不安定に身体が揺れる。これが何ともいいようなく心細い。ときどき堪えきれなくなると、三郎はクーン、クーンと聴うえるように啼いてみた。

「よしよし、よしよし！」

獣医さんの声が聞える。生れたときから馴染みのこの声が聞えると、三郎は安心した。

獣医さんの膝の上に乗っかっていて、体臭のなかに包まれているので、恐ろしい轟音も動揺も、どうにか我慢できる。

ずいぶん長いあいだ揺られていった。三郎はくたびれてしまつてうとうととまどろんだ。バスケットから出されて眼をさましたら、明るい家の広い部屋のなかだったので三郎は菟うのようにころころと一周り駆はつてみた。床の敷物がふわふわして足許がたよりない感じだった。

あら可愛い！ まあ、なんて可愛らしいんでしょ。賑やかな女たちの声がするので三郎はきょとんと眼を睜^{みは}った。三人の女たちがテーブルを囲んで、獣医さんと話していた。

「まあ、縫いぐるみの玩具そっくりね、おいで、おいで！」

「いらっしやい、いらっしやい！」

大歓迎らしいや、と三郎ははしゃいで、女たち三人の手に捉まらないように、手のあいだをすり抜けすり抜け駆け廻った。足許がふかふかして、蹴っても弾みがつかないので少々妙な具合だな、と思いつつながらも駆け廻った。

ぐるぐる勢いこんで駆けていると、突然、眼から火花が散るような痛みがおでこに走った。チーク材の椅子の脚におでこを思い切ってぶっつけてしまったのだ。あんまり痛かったので三郎はちょこなんとそこに坐りこみ、前脚を上げておでこを何度も撫で廻して啼いた。

「いたっ！ いたっ！ 痛いよオ、痛いよオ、キューンキューン！」

ところが女たちは三郎をとり囲んで笑いこぼれた。縫いぐるみの玩具そっくりの三郎が短く小さい棒のような前脚で、不器用におでこを撫でては啼くのは、何とも可愛らしくて、涙がでるほど笑いこぼれている。

「犬っていうのは、鼻と耳は人間の何十倍も鋭敏ですが、視力は非常に弱いんですよ。動くものに対してはいいんですが、動かないものはよく見えないんです」

獣医さんがそういつて説明した。

（——なにいつてやがる。こっちは笑いどころじゃないよ、

三郎はまだどこか恨めしげに、しょぼんと坐っておでこを撫でている。猫が顔を洗うときのように、三郎の小さい短い前脚は、つるりとおでこを撫でては下りる。身体がどう見ても縫いぐるみの玩具の仔犬としか見えないのに、それが動くことが不思議でならない。動くだけではない、椅子にぶつ付たおでこが痛いといって短い棒のような小さい脚で、不器用に撫でて泣くのだからもうもう不思議で仕方がない。

「よしよし、痛かったね、よしよし……」

やっと笑いやめて私は、水で絞ったタオルを、膝に抱きあげた三郎の小さいおでこにそっと押し当ててやった。

（——ひんやりして、ああ、いい気持！）

三郎はちんまりと私の膝に抱かれ、眼を細めている。仔犬の高い体温が伝わって、膝がほてって来る。生きものの愛しさが、そこから私の全身に染みわたってくる。いのちあるものの、かけがえのない大切さ、やさしさが……。生きている限りは、これからの歳月をともしする生きもののいのちを、私は大事に、大事に抱いていた。

日本犬の扱い方について、獣医さんがいろいろ注意して帰っていったあと、私は三郎にまず彼自身の名前を教えた。

「お前の名は三郎というの。わかった？ 三郎！ と呼んだらさっと駆けてくるのよ。サブローなんかじゃない、三郎と漢字の立派な名前よ。お前はうちへ来た三代目の息子で、純粋な日本犬だからね」
ちょうど来合せていた女客一人にも三郎を紹介し、三郎にも教えた。

「こちらが中央新聞社の三枝さん。あちらが東京出版社の榊さんよ。どうぞよろしく」

三郎は柴犬特有の小さい素朴な、誠実そうな眼で二人を眺めた。三枝さんも榊さんも、大の犬好きであったから、しばらくは訪問の目的などそっちのけになってしまつて、玩具そっくりの三郎と遊んでいる。

三郎のわが家での出発は、こうして祝福された仕合せなものであった。

いまでも私は犬とともに暮して来た。三郎が決して初めてではない。ラディ、ルカ、という名前の二代は、いずれもコッカースパニエル種の牡であった。例の『ワンワン物語』に出てくる耳の長い、長毛の洋犬で、一時大流行した種類であったが、うちのはアメリカン系ではなくて、イングリッシュ系であった。

三郎は初めての日本犬である。日本犬の愛好家として有名な、近藤啓太郎氏のお世話で、柴犬保存会からうちへ来た。十数年間、二代にわたって洋犬と暮してきた私が、初めて純日本種の柴犬に執心するようになったのには、ちょっとしたいきさつがある。

もちろん、そんなことを三郎は知るはずもない。私自身も三郎を迎えたとき、そのいきさつに何のこだわりも感じてはいなかった。しかし、あとから考えてみると、そこには私の、人間の身勝手さが働いていたのにちがいない。それに気づかなかつたのは私の誤算であった。しかし、その事実に基づかるまで、三郎も私も無事平穏で、彼は順調に成長していった。

三郎は小さい短い足でころろと駆け廻る。百坪ほどの庭のうち、赤い屋根の自分の小舎のある茶

の間の前庭だけで遊んでいて、ほんの少し離れた芝生の方へは行こうとはしない。

私は仕事部屋のガラス戸越しに三郎の様子をときどき気をつけている。見ていると、十センチメートルほどの石段でも、彼はよくよく用心深く頭を傾^かけて眺めた末に、やっぱり危いや、やめところ、というふうに降りようとはしない。犬にも生れつきの性格があつて、それは人間の子供と同じほどこいろいのタイプがある。

大胆で、とてもまともには降りられないほどの高さのところでも、構わず眼をつむつて身体ごと転がり落ち、方々手足をすりむきながらも新しい世界を探検するやんちゃ坊主もあれば、床下のようなへんに暗いところ、せまいところに潜りこんでいて、すっかり行方不明になつてこつちを狼狽させるものもある。探しあぐねてもう半分諦め、暗い気持になっていると、どこかでキューン、キューンとかぼそい啼き声をする。それをたどつてゆくと、とんでもないせまいはざまに落つこちで、さすがに自力ではどうしても脱出できず、はじめて救いを求めている。そんな、むやみと好奇心ばかり旺盛で、無鉄砲な放浪好きのやつもいる。

三郎はかなり用心深く慎重で温和な性格であるらしいことが、二、三日観察するうちに私にわかつた。喬木の多い私の庭では、梢を渡る風が音立てて過ぎてゆく。小さい三郎には松や椎の高々と茂っているあたりは深山のように思われるのだろうか。風が梢を鳴らして渡つてゆくと、怯えて樹々の梢を見上げ、左巻きに格好よくきりと巻きあげた尻尾を、思わずだらんと垂れたみっともない姿になつて、急いで小舎のなかにはいつてゆく。人間にとつても心の落着かない風の日の、びゅーんと虚空を切り裂くように渦巻いてゆく音は、十何倍にも感じる彼の聴覚には堪えがたいものになるのだろう。

三月一日生れの三郎は、まだようやく二ヶ月足らずである。初夏を迎えて庭には牡丹やさつきやつじや薔薇が咲きつづく。獣医さんが繰返し自慢したように、三郎はなかなかの男前で、まだ可愛らしい一方だが、金茶色の穂のように庭の花々のあいだを駆けているのは、心が和む風景だった。

「三郎、三郎おいで！」

仕事の合間には庭にでて、何度でも繰返して名を呼び、ゴム穂を投げて相手になってやる。小さい穂も三郎の小さい口にはさらにあまるらしく、くわえきれなくて持て余している。結局鼻の先で突っついて転がすのが関の山であった。

「三郎、三郎おいで！」

ことごとく私は彼の名を呼んでやる。ともかく彼は二日目にはもう自分の名を憶えた。

「やれやれ、お前、どうやら馬鹿じゃないらしいね、こいつめ！」

三郎を抱きあげ、牛乳の匂いのまじった稚^{わか}いけものの体臭を、私は愛おしんだ。三郎の生れたままの柔毛^{やわらか}は綿のように柔いのだった。

ある日、私は三郎を抱きあげて芝生までつれていった。芝はいまようやく芽が伸びそろったばかりで、まだ刈るには早い緑であった。それでも小さい彼にはかなりの茂みに感じられるらしく、弾みをつけて身体を浮かせるようにして駆ける。芝の感触が彼の血のなかの野生への郷愁をそそるらしく、ひどく愉しそうである。ときどき立ちどまっては周りを見廻し、（——ずいぶん、広いなあ。こんなに駆けて来て、大丈夫かなあ？）

という顔をし、私を探している。

（——愉しいよ、凄くいい気持だよ！）

「三郎、こっちおいで。こっち。ほら、お前のおうちはこっちだよ。芝生からこっちへ歩いてくるとお前のおうちがあるんだよ、わかったかい？」

芝生から赤い屋根の三郎の新居までは十メートルそこそこしか離れていないが、三郎にしては大旅行であつたらしい。懸命に歩いてついでくる。小舎にたどりつくと、あきらかにほっとしたらしく中にはいつてくるっと身体を丸めた。

（——ずいぶん遠いところへいつて来たんだなあ、くたびれたや！）

といったやさしい眼で私を見上げて、小さい口いっぱいの大あくびをした。眠くて眠くてたまらないらしい。

そんないかにも幼い生命の様子が、私に壊れやすく貴重なものに思われる。生後二ヶ月足らずといえ、人間の子ならまだ虫のようにうごめいているだけというころなのに、もうちゃんと自分の足で独り歩きをし、初めての世界を眺め、体力の許す限りその世界を探索して、そこで生きる用意をすでに始めている三郎が、私の感動を誘う。

こんな、縫いぐるみの玩具そっくりの可憐ないのちが、自分のあずかり知らぬところで数枚の一万円札と引き換えに自らの生涯を決定され、私のようなものを主人とたのんで、精いっぱい生きようとしている健気さが、私を感動させる。そこにはやはり野生の生きものの甘えのない生き方の伝統が残っている。金銭で取引されるものになり下ったとはいえ、自分のいのちは自分で守るという野生の覚悟は、すでにこんな幼い三郎にもあるのだ。

泥棒氏との出会い

「三郎、早く大きくなってワンと吠えるのよ。いいかい？ ワンワンって吠えるんだよ」

東京出版社の榊さんは、ちょいちょいやって来て、来れば必ず三郎と何十分か芝生で遊んでゆく。むくむくした小さい彼を抱きあげて、そういつてきかせている。

三郎がこの家でいかに大いなる責任に応えなければならぬかを、いまからせつせと教えこんでいるのである。

「三郎くん。ちょっと見てご覧。ここから泥棒がはいったんだって！ ぼくが大きくなったら、泥棒の番がお役目よ。わかったかい？」

榊さんは小さい三郎の身体を裏門の高さまでさしあげて、塀の外を覗かせてみたりしている。

私は眺めていて笑い出した。

もしもあの夜、こんな幼い三郎が家にいたとしたら、私は三郎を守るために気が気じゃなかったにちがいない。

あの泥棒は凶悪ではなかったと思う。しかし、あの裏門を乗り越えて侵入して来たとき、まだ吠えることも出来ない三郎が、嗅覚の方もまだ半人前ながら、そこは何といっても人間とは比較にならない